

ひびき

すべては
子供たちの
笑顔のために

〒384-0006
小諸市与良町6-5-5
Tel.0267-31-0251
Fax.0267-31-0140



バックナンバーはこちらから

東信教育事務所

令和5年
(2023年) 12/20

ひびき

Vol. 6



強く
しなやかに
～節目をつくる～

- ❶ “授業から学ぶ”
 - ・対話的な学びの充実を目指して
～考えを深める工夫～
- ❷ “研修の窓”
 - ・子供の視点で考える授業づくりを目指して
～初任者研修 教師力向上研修Ⅲ～
 - ・知る、話す、つながる
～第2回東信地区外国人児童生徒等指導研修会～
- ❸ “考える部屋”
 - ・「個別最適な学び」の実現に向けた「ICTの活用」
 - ・人権感覚を磨くために私たちができること
～東信地区学校人権教育連絡協議会から～
- ❹ “生涯学習課より”
 - ・地域コーディネーター研修会

授業から学ぶ

(中1・社会)
「アフリカ州」



対話的な学びの充実を目指して ～考えを深める工夫～

学習の中で、話し合いの時間をとったものの、話し合いが思うように深まらなかった経験はありませんか。生徒が友との関わりの中で自らの考えを表現したり、自分の考えを再構成したりする授業を目指したA先生の授業づくりの工夫や支援を紹介します。



【中学1年生 アフリカ州の学習の一場面】

グループでの話し合いでは、自分が調べてきたアフリカ州が抱える問題と要因について主体的に友に伝えていました。そして、自分と友の調べてきたことの共通点や関連を考え、アフリカ州の飢餓の問題を、産業の視点からだけでなく、紛争の視点を加えて説明するなど、アフリカ州の抱える問題を複数の要因から捉える生徒の姿が見られました。このような生徒の姿が見られた背景には、A先生のどのような工夫や支援があったのでしょうか。

1 追究したくなる問いが生まれる工夫

A先生は、生徒が抱えているアフリカ州のイメージと現実とのズレから問いが生まれるように、アフリカ州のイメージについて尋ねた後、飢餓に苦しむ人々や銃を持つ子供、人で溢れる町の様子の写真を提示しました。



単元名「アフリカ州」 A先生が実践したアフリカ州の単元展開

① アフリカ州が抱える問題との出会い (アフリカ州のイメージと現実とのズレ)

1

なぜアフリカ州は、貧困問題、紛争問題、環境問題、都市化の問題など(様々な)問題を抱えているのだろうか

← ② 問題が起きる要因を予想し、追究の見通しを持つ

2

← ③ 教科書などから調べたことをスライドにまとめる

← ④ 調べてきたものを持ち寄り、問題と原因の繋がりを友と考える

3

← ⑤ 問題を克服する取組を調べる

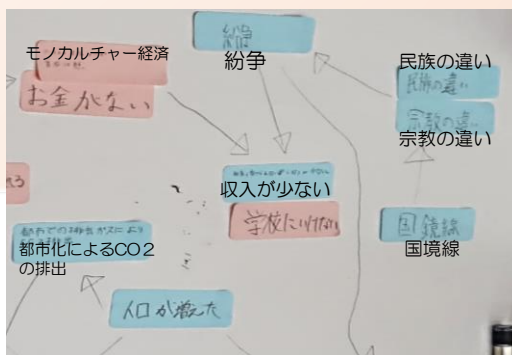
⑥ アフリカ州の特色をまとめよう

アフリカ州は干ばつが続くサヘルなど厳しい自然環境や植民地時代のプランテーションに起因するモノカルチャー経済により、収入が不十分である。貧しさから抜け出すため、海外の援助や自国の努力など、自立への道を歩み始めた地域である。

2 自分の考えをもち、友の意見を聞きたいと思える問いかけ等による支援

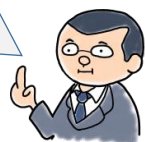
A先生は、問題と要因がどのようにつながるのか問いかけたり、根拠となる資料を共に確認したりすることで、自分の考えを確かなものにする支援をしました。さらに、「〇〇さんは、飢餓の問題を紛争の視点から調べているよ」と同じ問題を別の視点から追究している生徒を紹介し、友の意見を聞きたくなるような声掛けをしました。

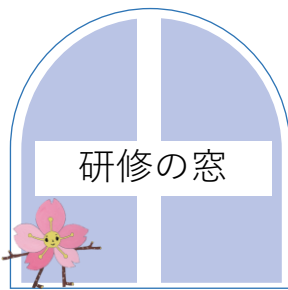
3 お互いの意見の共通点や関連をつかみ、自分の考えを再構成する工夫



自分と友の意見が分かり、共通点や関連を考えることができるように、問題が生じる原因を書き込んだ付箋を用いてウェビングマップを作成する活動を位置付けました。

A先生の実践には、単元を通じて対話的な学びを充実させる支援や工夫がありました。対話的な学びを充実させることで、生徒が社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究できるように「生徒が問いをもつ、追究し自分の考えをもつ、対話を通して考えを深める」といった学習過程を大切にしたいですね。





子供の視点で考える授業づくりを目指して… ～初任者研修 教師力向上研修Ⅲ～

自己課題に対する取組を「子供の視点」で振り返り、仲間と語り合いました。その中で、1年のまとめに向けて、自分のこれからの取組が具体的に、見通しをもつ初任者の先生方の姿が見られました。



自己課題に対するこれまでの取組を語り合う



【初任者の自己課題】

- 全員が力を発揮し、認め合う学級づくり
- 主体的な学びが実現する授業づくり など

【研修後の初任者の声】

- どの先生方も自己課題や目標を達成するために様々な工夫をされており、日々追求していく姿に自分も刺激を受けました。
- 主体的な学びを実現させるのは難しいと思うことが多いですが、子供たちの声を拾い、疑問を受け止められる学びを行っていきたいと、改めて考えることができました。



自己課題に対する実践を、持参した資料や教材を基に、体を乗り出して熱く語る姿が見られました。また、仲間からは「そのような子供の姿が見られたのはどうしてか？」といった質問が出され、それに答える中で、改めて自分の支援や手立て、子供とのかかわりを振り返る姿がありました。参加者の様子から、「子供たちの輝く姿」を思い描いて日々の授業づくりに取り組んでいることを感じました。



困難やつまづきを抱える子供の姿から、具体的な支援を考え合う



体験 困難を抱える子供の気持ちや感じ方を演習を通して考えよう！

- ①先生方は子供役
- ②利き手ではない手で画面に出る漢字を書く
- ③時間は15秒以内

鶴鳥

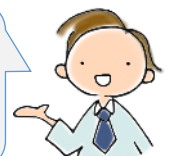


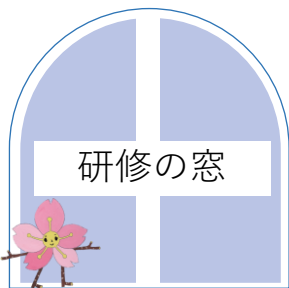
【研修後の初任者の声】

- 子供達の実態にあった支援をしていると思っていたのが、本当に個々の姿を見ているのかという考えに変わり、自分の子供達の見方を振り返ることができました。今後、“私の困りは子供たちの困り”と考え、授業を行っていきたいと思いました。

子供が困っている状況について、体験を通して考えました。日頃の支援を振り返り、教師から見て困難さがあると思われる子供には、それ以上にその子が困り感を抱えていることに気付くことができました。その子はどのようなことに困っていて、その子に合った支援はどうあるべきかを考えることの大切さを仲間と共有しました。

実践を振り返り、いろいろな人と語り合うことは、自分の実践についての意味付けができ、これからの取組に対して見通しをもつことにつながります。また、日々の子供とのかかわりの中で、子供の目線に立ち、子供の立場で考えることは、どの年代になっても心掛けていきたいですね。





知る、話す、つながる

～第2回東信地区外国人児童生徒等指導研修会～

11月14日に上田市立南小学校で行われた「第2回東信地区外国人児童生徒等指導研修会」は、4年ぶりの参集での開催となりました。研修の様子をハイライトでお伝えします。

知る

「日本語教室の授業ってどうやってやればいいのか？」「通常学級に外国人児童生徒のために、どのように指導したらいいのか？」そのヒントとなることを授業を通して考えました。

日本語教室の授業から



教材中の言葉の意味や文型を理解するために、こま回しの実体験を通して学ぶ場面を設定していて、とても参考になりました。



2年生の道徳の授業から



担任の先生は難しい言葉を避け、簡単な言葉を使うように心掛けていました。それはきっと外国人児童だけではなく、全ての児童に大切なことだと思いました。



話す

「松本市子ども日本語教育センター」のコーディネーター、栗林恭子様と西尾淳様を講師にお招きし、日本語の初期指導の教材や通常学級の教材、DLAの活用、進学に向けた支援等について、情報交換等を行いました。

栗林先生がおっしゃっていたように、小中連携に向けた一つの取組として6年生にDLAを実施したいと思います。



※DLA
Dialogic Language Assessmentの略。
児童生徒の日本語の能力を把握し、
その後の支援について検討するた
めのアセスメントのこと。



西尾先生は、書くことはもちろん大事だけど、話せることや伝えることも大事だとおっしゃっていました。机上だけではなく、今日の日本語教室の授業のように、遊びや体験の中で日本語や正しい使い方を覚えることも意識したいです。



外国人児童生徒のための
JSL対話型アセスメントDLA
(文部科学省HP)

つながる

今回の研修には、日本語指導に携わる、上田市教育委員会や上田市多文化共生推進協会の皆様にもご参加いただきました。この研修会を機会として、関係者同士のつながりをもつことができました。

外国人児童生徒によりよい学習環境が整うよう、学校、行政などが力を合わせていくことが必要だと思いました。



研修会を通じて、具体的な日本語指導や児童生徒の支援について理解を深めました。自分の実践や悩みについても話し合い、日本語指導にかかわる方々のつながりができました。東信教育事務所ではこのような研修会を年2回(6月、11月)行っていますので、外国人児童生徒を担当している通常学級の先生方もぜひご参加ください。

考える 部屋

「個別最適な学び」の実現に向けた「ICTの活用」

～中学校数学の授業改善を通して～

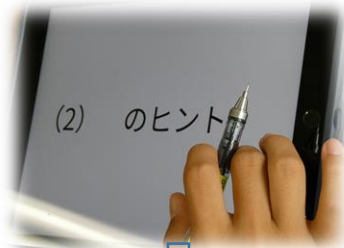
「個別最適な学び」の実現に向けて、どのような工夫を考えますか？
また、その中で、ICTの効果的な活用の在り方をどのように考えていけばよいのでしょうか？

T中学校の実践から、考えてみましょう。

T中学校では、「自らの学びを語り合うことができる生徒」に向けて、生徒自身が自分に最適な学習方法を選択し、ICTを活用しながら学びを深める場を設けています。



生徒が自分に合った学び方を選べる → 中学校3年「二次方程式の解き方」



教師から送られたヒントカードをタブレットに表示して、参考にする。



タブレット上に提出された、友達の考えを参考にしながら考えてみる。



それでもわからないところを教師に質問して、一緒に考える。

説明
 $2x^2 - 10x - 48 = 0$ は 2 でわけるので $2x^2 - 10x - 48 = 0$ は $x^2 - 5x - 24 = 0$ となる。
 $x^2 - 5x - 24 = 0$ を因数分解すると $(x-8)(x+3) = 0$ となるので 答えは $x = 8, -3$ 。

問題解決に必要な情報の収集を、「タブレットのヒントカード」、「友達」、「先生」から自分で選択して問題を解決したA生は、授業の最後に、問題解決の過程のポイントを踏まえながら、「自分なりの言葉」（つまづいたところを中心に）まとめて書くことができました。

教師が一人一人の学びを捉える

教師は、タブレット上に提出された生徒の個人追究を見て、一人一人の困り感やつまずきを捉え、授業中に個々に応じた適切な支援をする。



ICTの活用により

生徒は「学習の振り返り」をクラウド上に提出し、自分の学習の蓄積を振り返ることができる。
教師は「学習の振り返り」から個々の生徒の成長やつまずきの理解に活かす。

「個別最適な学び」は、子供が自己調整をしながら学習を進めていくことが大切です。ICTの活用は、子供が自らの学習の方法を選択する際の手段となったり、瞬時に他者の考えを参考にできたりするよさがあります。教師には、「一人ひとりの学びを捉え、その後の指導に活かす」のに有効です。各学校や各教科でも、「個別最適な学び」の実現に向けた「ICTの活用」について考えてみましょう。

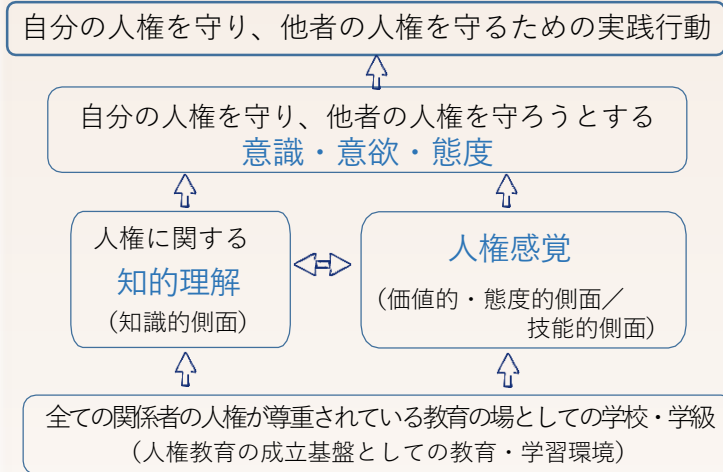


考える 部屋

人権感覚を磨くために私たちができること ～東信地区（佐久・上小）学校人権教育連絡協議会から～

人権教育は、学校や家庭、地域などあらゆる場で行われる教育活動です。多くの学校で、人権教育の強調期間等に取り組んでいるのではないのでしょうか。機会をとらえて、人権教育の考え方や学習活動の在り方について、職員で語り合ってみましょう。

○人権教育を通じて育てたい資質・能力



学校における人権教育の目標は、一人一人の児童生徒がその発達段階に応じ、人権の意義・内容や重要性について理解して、**[自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること]**ができるようになり、それが具体的な態度や行動に現れるとともに、人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながるようにしていくことです。

また、人権教育の目的達成のためには、人権や人権擁護に関する**知的理解**と、人権がもつ大切さを直感的に共感的に受けとめられる**人権感覚**を育成することが必要です。

参考資料：人権教育の指導法等の在り方について [第三次とりまとめ] 長野県教育委員会人権教育指導資料集



Q. 子供たちの人権感覚を育成するために大切なことは？

人権感覚は、単に言葉で教えることができるものではありません。左上に示された図からも分かるように、人権感覚を身に付けるために、まず土台となるのは、学級をはじめ学校生活全体の中で「自らの大切さや他の人の大切さが認められている」ことを児童生徒自身が実感できる環境が当たり前にあることです。

そのような環境づくりのためにどのようなことをしているか、書き込んでみましょう

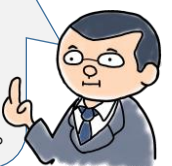
○○の場面で	○○に取り組んでいる・○○を意識している
(例)子供の名を呼ぶ場面	(例)子供によって異なる呼び方をしない(さん・君で呼ぶ子と、呼び捨てや愛称で呼ぶ子等)

人権教育は教育活動全体を通して行うため、日常的な指導が基盤となります。日常的に児童生徒と多くの時間を共に過ごす教師にとって、意図のあるなしに関わらず、すべてが常に子どもたちに届いていくものであることを再認識しましょう。

私たち自身の人権感覚を磨くために、私たちは、どのようなことができるでしょうか？

知的理解と人権感覚は、相互に関連・補強し合う関係にあります。どちらか一方に片寄らないようにするためにも、人権教育の全体計画や年間計画を活用し、学校における教育目標全体の中での位置付け等を明確にした上で、取組を進めてきましょう。

東信教育事務所では、人権教育の指導方法等の改善・充実はもちろんのこと、全体計画や年間指導計画の見直しの相談も受け付けております。ご連絡をお待ちしております。



人権教育主任、研究主任の先生

このページを印刷、配布して、先生方で人権感覚を磨くためにできることを語り合うミニ研修などにお使いください。

地域コーディネーター研修会

12月4日（月）開催

「学校と地域、社会がつながるポイント」を長寿社会開発センターの戸田千登美さんの講演と地域での実践に学びました。活動事例は、長野市第三地区住民自治協議会事務局長の浅倉信さん、御代田町社会福祉協議会福祉係の山田翔太さんが紹介しました。

講師の戸田さん



戸田さんのお話より

○異なる立場の人や組織間で対等な関係を作り出す力

言われたことを行うのではなく、「こんな提案はどうか」ということも受け入れながら

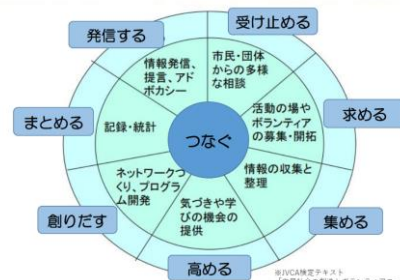
○異なる立場の人や組織がつながることで

総合力や新たな解決力を生み出す力になる

○住民参加をすすめるヒント

- ・それぞれの組織内で意識の共有
- ・お互いの状況をよく知る。普段から気軽に連絡できる関係、対等に関わり合える仕組み
- ・参加のきっかけは敷居を低く
- ・ボランティアの主体的な意見やアイデアを取り込むことで新たな力が生まれる

ボランティアコーディネーター 8つの役割



浅倉さんの取組

地区の課題

- ①新築マンションが増え住民同士の交流が少ない
- ②地区内の町同士との交流が少ない
- ③子ども同士の交流が少ない

解決のために

学校と子どもの力を活用して町おこしを！

学校と地域をつなぐイベントを開催

- ・ホテル観賞会
- ・学校の畑の一部を地区に開放し、地域住民と子どもと一緒に市民農園
- ・小学校と地区の合同防災訓練 など

山田さんの取組

地区の課題

- ①学校現場では繁忙でなかなか地域に出ることは難しい
- ②地域側も子どもとの関わりが薄い

解決のために

地域が学校に入ればよいのでは？
孤立しがちなシニア世代の居場所づくり

ボランティアルームの設置

- ・9:00～16:00に地域住民が自由に来る
- ・業間に子どもと交流
- ・ノートに様子を記載して、情報共有
- ・みんなのアイデアで可能性が広がる場

実践発表者を交えて意見交換

参加者の感想より

- ・地域の課題をCSで解決していくという視点はとても面白いと思いました。CSと住民自治組織が1つになるとよいという気づきがありました。
- ・お互い様の精神がとても大切だなと思いました。また、地域と学校がそれぞれ 共通認識をもって行うことも大切だと感じました。地域に詳しい人を中心に 活動が広げられたと思いました。



地域と学校とで課題や願いを共有して活動することは、子どもの育ちだけでなく、地域づくりにつながる可能性をもっていると感じました。

